

その他

コロナ禍におけるオンライン授業の実践 —問題点と今後の課題—

岩崎大輔 *

京都薬科大学 一般教育分野

本稿はコロナ禍における 2020 年度の授業の実践報告である。筆者が非同期型（オンデマンド型）授業を実施する中で顕在化した様々な問題点を紹介し、オンライン授業の問題点と課題について考察する。具体的には動画作成時の問題点、提供するスライドの作成方法、課題の提示とフィードバック、試験及び評価方法を取り上げ、どの部分が問題であったのか、より良い授業を行うためにはどのような方法が考えられるのか、など 2020 年度の授業の反省点と今後の授業を改善するための方法について検討する。

キーワード：コロナ禍、実践報告、オンライン授業、オンデマンド型授業、授業改善

受付日：2021 年 2 月 5 日，受理日：2021 年 3 月 23 日

はじめに

本稿はいわゆるコロナ禍における京都薬科大学の授業（特にドイツ語）の実践報告であるが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によって引き起こされた日本の大学の状況を総括的に描くものではなく、あくまでも筆者自身が体験し、実施してきた活動録である。2020 年初頭より始まった COVID-19 の拡大に伴う学校閉鎖や、4 月からの授業方法の転換については既に多くの報告がなされ、オンライン授業の実践方法についても多くの関連書籍が書店店頭に並んでいる。それらに見られる優れた授業例や注意点を参照すると、自身が関わった授業とその方

法については様々な問題が含まれており、多くの課題や反省点が見られることから、2020 年度が終了しようとしている段階でひとまず振り返り、今後の授業改善のための糸口を見出すのは意味のある作業と思われる。本稿ではまず筆者自身がオンライン授業を実施するに至った経緯を概略的に述べ、その後でオンライン授業の問題点と課題を自身の授業を基に考え、最後に今後の課題を考えてみたい。なお、本稿について報告する内容はあくまでも筆者自身が実践し、感じたことをまとめたものであり、勤務校である京都薬科大学の講義全体に該当するわけではないことをはじめにお断りしておきたい。

1. オンライン授業開始に至る個人的状況

筆者は 2020 年 4 月より現勤務校である京都

* 連絡先：
〒607-8414 京都府京都市山科区御陵中内町 5
京都薬科大学 一般教育分野

薬科大学に着任することとなった。そのため京都薬科大学をはじめとする全国の大学がCOVID-19による大混乱の中で新学期を迎えなければならなかった状況に、勤務校についての知識をほとんど持ち合わせていないまま授業を開始させなければならないという個人的な状況とが加わり、落ち着いて授業を行う環境に至るまでにしばらくの時間を要した。本来であれば授業を実施しながら絶えず授業の改善方法を探り、より良い授業を提供しなければならないというのが教育者としての本来の姿であるべきなのであるが、このような状況から、自身の活動や授業内容、実施方法について振り返り、様々な情報を摂取するだけの余裕が生じたのは、2020年も終わろうとしている頃であった。

はじめに本学全体の状況を振り返り、どのような中でオンライン授業を開始したのかを確認するが、その前に本稿で用いる「オンライン授業」について整理をしておきたい。オンライン授業とは厳密に見れば、「同期型・非同期型」、「一方向・双方向」の組合せにより、4つの授業形態が考えられる。本稿においてはこれらの総称として「オンライン授業」を用い、「同期・双方向型」を「リアルタイム・オンライン」、非同期型（一方向・双方向とも）を「オンデマンド」と表記することにする。オンデマンドが一方向か双方向かは各教員が授業に対して行うフィードバック方法によって異なり、必要に応じて「非同期型・一方向」、「非同期型・双方向」と表記する。

まず時系列に沿った国内の動きと本学の対応を確認してみたい。政府の新型コロナウイルス感染症対策本部によって、3月2日より春休みまで小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に対して臨時休校が要請されたことを受け、本学においても自身の着任前3月2日より13日まで休校措置が取られることとなった（以下の情報は本学ホームページ内「NEWS」の「お知

らせ」に基づく）。その後状況が快方に向かわないために3月9日付で3月31日まで本学の休校措置を延長すること、さらに3月25日の段階で4月1日から19日の状況に関して、休校措置は解除するが入構制限は継続することが発表された。その際4月6日開始予定の授業については、50名未満の講義、演習は基本的に実施、50人以上の講義、演習は収録して配信（オンデマンド型授業）する方針が併せて伝えられた¹⁾。筆者が前期に担当する科目は語学科目（1年次の「ドイツ語と文化A」、2年次の「ドイツ語2A」）、「人と文化」科目の講義科目「外国文学A」（1年次対象）、1年次を対象とする初年次教育の一つである演習科目「基礎演習」の4つである（後期は「ドイツ語と文化B」、「ドイツ語2B」と、2年次の「歴史B」）。このうち、基礎演習以外の科目については事前にオンデマンドで実施するか、ひとまず休講とし、のちに補講を行うかの問い合わせがあった。筆者は収録に関するノウハウを全く持ち合わせていないためにこの時点では後に補講をする選択を行った。なおオンライン授業を選択する場合は、4月6日までに第1回目、4月13日までに第2回目の講義の収録及びアップロード、本学が使用している学習管理システム（LMS = Learning Management System）であるmanaba（朝日ネット）上でのリンク先公開、という条件が付されていた。その後3月30日付で4月19日まで休校措置を延長、さらに4月8日付で5月10日まで休校措置を再延長し、5月11日以降対面授業を実施する予定が発表された。最終的に4月27日付で前期のすべての講義をオンデマンドで配信すること、5月5日付で休校措置を5月31日まで延長することが決定された。そのため休講としていた授業を含め、すべての授業をオンラインで実施しなければならない事態となり、決定が通知された4月8日以降になって、予定してなかったオンライン授業の準備を行わ

なければならず、情報収集や実際の行動開始が遅れてしまった。オンライン授業を行う場合、授業方法が変更になっただけであり、授業のスケジュールは本来の学事暦通り4月6日からの週を第1週とすることが前提とされていたため、担当していた科目（ドイツ語、外国文学）に関しての当初の課題は、最初の数回の遅れを取り戻し、本来のスケジュールに追いつくよう配信作業を実施することであった。また少人数制で行う基礎演習の実施についてはこの時点では保留とされ、実習や体育といった実技科目の対面授業での実施が再開される6月以降、再開されることとなった。

大学側が提示した講義収録方法は、講義室で通常通り授業を行い、その様子を録画する Spider Rec による収録（IP カメラレコーダシステム Spider Rec 及び動画管理配信システム CLEVAS の併用）、Microsoft Teams による収録、Microsoft Power Point による収録、の3つである。筆者の講義はオンデマンド授業で配信を行い、課題は後に提出するよう指示を出し、一方向の授業を実施した。収録を開始した4月8日の時点では、5月11日以降大学構内での対面授業が再開される予定であったことから、課題は再開後授業時に教員へ提出するとしていたが、この対応方法もその後の決定によって manaba 上での提出、返却というように変更しなければならなかった。その後5月21日に京都府の緊急事態宣言が解除されることを受けて、入構制限が一部緩和され、6月から実習や体育といった一部の授業が再開されることになった。それによって課題や質問は6月以降の登校時に研究室で行う、ということも可能となった。

本来、授業のスタイルやルールの周知については学期初頭の数回の授業内で徹底的に提示することが肝要であり、その時期を逃して後から新しいことを始めようとすると混乱が生じ、定着しないことが多い。しかしながら今年度の授

業についてはそのような事態になってしまい、前期終了時までこの混乱は収まることはなかったように思われる。

そのような中、4月16日より始まる全国を対象とする緊急事態宣言発令後は在宅勤務が推奨されたものの、基本的に教職員の構内への立ち入りが全面的に禁止されなかったことは不幸中の幸いであった。大学によっては教職員も含めて一切の立ち入りが禁じられたため、自宅から授業を配信するにしても必要な教科書や文献等を取りに行けずに困っている、という声を他大学の複数の教員から聞いたからである。そのため授業の収録、学生へ配布する資料の作成、文献のスキャンやコピー等は自身の研究室で問題なく準備することができた。

2. オンライン授業の実施方法

こうして始まった講義収録であるが、上述の3つの方法のうち、Spider Rec による収録は収録可能な講義室を予約してからでなければ実施できず、必ずしも時間割に合わせた配信がなされるわけではないため、基礎演習を除く3つの授業のいずれも Microsoft Power Point（以下パワーポイント）で実施することにした。

1年次の「ドイツ語と文化」に関しては、シラバス上、2回の授業で1課進むペースとしている。そこで内容と分量を見て1回の授業の内容を定め、パワーポイントのスライドを作成する。すべてのスライドを作成した後、「スライドショー」でアニメーションの動作、誤字の確認、解答のフォント等を確認し、問題がなければ続いて「スライドショーの記録」で収録を開始する。この場合はノートPC内蔵のカメラ、マイクを使用したのが特に大きな問題はなかったように思われる。練習問題に取り組む時間を見込んで、収録時間は毎回60分前後であった。

当初はカメラをオンにし、教員の顔が映るようにしていたが、オンデマンド型授業において、発音の練習の際に口の開け方等を注意する以外には特に教員の顔が見えていなくても困らないので、途中よりカメラは付けずに、音声のみの収録を行った。これによってファイルサイズが小さくなり、以後の作業を進めやすくなった。収録後は「ファイル」欄から「エクスポート」、「ビデオの作成」と進み、「標準（最小サイズ）」のファイルサイズを選択し、mp4形式への変換作業を行った。当初はデフォルト通り「フルHD」のサイズを選択していたが、データ変換作業に予想以上の時間を費やすことが分かったため、途中より変更することにした。その後Office 365のアプリケーションStreamで「動画のアップロード」を行い、「マイコンテンツ」より「ビデオ」を選択、「共有」からURLを取得し、manaba上に作成したコンテンツ内に講

義動画としてリンクを貼った。最後にコンテンツを公開し、「コースニュース」から講義動画公開を受講生に知らせ、一連の作業が終了する。コンテンツ内には講義資料として、動画収録に用いた（音声なしの）パワーポイントスライド、各課の学習チェックシート（図1）、教科書の練習問題をWordファイルで作成したものを添付し、その他に「注意事項」として課題提出の有無や提出方法、出席登録の呼びかけ、今後の予定等について記した。

これらの作業は筆者にとって初めて行うことばかりであったが、大学が作成した講義収録に関するマニュアルのおかげで、手順通り実施すれば特に問題を抱えることなく進められることが分かった。公開までの作業の中で時間がかかったのはビデオファイルへの変換作業であり、平均して1時間ほどの時間を要した。その際別のソフトが起動しているとPCの処理能力

Basio-Grammatik, Deutsch in 3 Schritten.
基礎 A-1
動詞と人称変化(1) 学習チェックシート

A-1の目標	動詞の人称代名詞に合わせて変化させることができる seinを人称変化させることができる 平叙文、決定疑問文などの語順について理解することができる
--------	--------------------------------------------------------------------------------

学習項目 次の項目について、その項目ができるようになった日付をリストに記入しましょう
(☆:まだ練習中 ぬ:できる ※:とてもよくできる)

		↑	ぬ	※
人称代名詞	ドイツ語の人称代名詞をすべて挙げるができる duやIhrとSieの使い分けをすることができる			
動詞の 人称変化	動詞の原形（不定詞）を語幹と語尾に分けられる 規則動詞を人称変化させることができる 不規則動詞seinを人称変化させることができる			
語順	平叙文で動詞を適切な位置に置くことができる 決定疑問文を作ることができる			
ストラテジー	辞書を用いて動詞の変化を確認できるようになった ドイツ語の文を見て動詞がどれか語幹から大体の予想を立てることができるようになった			

演習 次の文のきちんとと理解できた、日本語に訳せた日付をリストに記入しましょう (☆:まだ練習中 ぬ:できる ※:とてもよくできる)

	↑	ぬ	※
Ich lerne jetzt Deutsch.			
Du lernst auch Deutsch.			
Wir lernen jetzt Deutsch.			
Ich bin Student.			
Bist du auch Student?			
Ja, ich bin auch Student.			
Ich trinkemorgens Tee.			
Nachmittags trinke ich Kaffee.			
Bier trinke ich nur abends.			

Basio-Grammatik, Deutsch in 3 Schritten.
基礎 A-1
確認・復習シート

1) 基礎 A-1 で学習した文法項目を書き出してみよう

2) 基礎 A-1 に出てきた単語、表現を下に書き出してみよう

図1 各課用「学習チェックシート」

が落ちることがわかったため、一度他のアプリケーションをすべて終了させる必要があり、この作業中はPCを用いた他の活動が制限された。後に収録までを研究室で行い、データを持ち帰ったうえで帰宅後変換からアップロードまでの一連の作業を自宅で行うことで円滑に作業を進められることが分かった。とはいえ、通常(いわゆる対面)のドイツ語の授業では教科書、辞書、授業案、補助プリント等を持って教室へ行き、板書しながら説明し、適宜練習のための時間を取ればいいのであるから、授業前後にこれらの作業を行うには、授業とは別の労力を必要とし、慣れるまでは1回の授業の準備に数日費やす必要があった。授業のための教材研究や授業案の作成、課題の添削や練習問題の作成といった、授業準備に直接関連することであれば特に問題はないのだが、授業の体制を整えるこのような一連の作業に対して多少なりともストレスが生じた。

また収録時に体験したトラブルとして、収録したはずの音声が発音されない、スライドの操作がうまくいかない、といったことが挙げられる。前者については、パワーポイントでスライドの記録を行った後は、スライド右下部にスピーカーマークが表示されることで音声データが付されていることが分かるが、記録のカウンターは作動しているにもかかわらず音声が再生されないといった事態が生じた。原因としては自分自身のICTスキルの不足によるものであるが、それ以上に反省しなければならないのは、収録後に教員自身が動画を確認しなかった点にある。本来であれば授業改善のためにも一度収録されたものを再検討し、視聴者の視点から改善の余地が残されている箇所、説明がわかりにくい部分、補足したほうが良い点などを見出し、よりよい講義動画を作成するべきであったのだが、学期中はとにかく追われるように授業準備をしており、そこまでの余裕はなかった。特に

講義科目については自分自身の研究領域と異なる部分が多かったことから、ほとんどすべての事柄を新たに調べなおし、教授内容を整理する必要が生じた為、1週間のうちほとんどすべてを文献講読に費やし、授業の収録やスライドの作成にはあまり時間がかけられなかったという点が大きい。そして収録後はまた次回の授業を期日までにアップロードするという作業が続く、常に疲弊していたといえよう。

後者については、スライドの記録中にクリックして次のスライドに進めると、通常のスライドショーとは異なり、前のスライドに戻れないことが収録中に判明した。パワーポイントの記録の長所としては、スライド毎に記録が可能であることから、録音し直しもできる点にあるが、実際の講義収録ではスライド毎に収録するのではなく、話しながらスライドを適宜進めたため、収録し直しとなると説明がうまくつながらない事態となってしまう。そのため結局再収録はせず、そのまま前のスライドを見ながら説明を聞くように指示を出し、説明を続けることにした。このことから講義動画視聴時にはスライドや講義資料等が受講生の手元になければ、授業内容の把握やノートテイクがうまくいかない状況を教員側がもたらしてしまうことが分かった。こうした事情を踏まえて動画公開に際しては必ず音声なしの講義スライド(収録に使用したものと同一もの)をコンテンツ内に掲示し、参照できるようにしておいた。

3. オンライン授業の問題点

前項の方法でオンデマンド型の授業を行ったのは、ドイツ語の2つの授業、「外国文学A」(前期)、「歴史B」(後期)である。「外国文学」と「歴史」については特定の教科書を指定せず、毎回パワーポイントによる資料の他、文学作品

からの抜粋を配布して扱う予定であったため、特に問題なく進めることができたが、1、2年次のドイツ語科目についてはいずれも実施に当たりいくつかの問題が生じた。一つ目は非常勤講師が担当する授業との調整であり、もう一つが教科書の著作権、そして学生側の教科書の保有状況の問題である。

a) 教科書

1年次の「ドイツ語と文化」は3クラス、2年次の「ドイツ語2」は2クラスで開講されている。オンデマンド型授業は当初は一時的なものとなる予定であったことから、それぞれ5月10日までの授業に相当する5回目、4回目までの授業を本学の専任教員である筆者が実施し、それらをすべてのクラスの受講生が閲覧するという形態で実施し、課題の対応についてはそれぞれの教員がmanabaを通じて行うことになった。その際、筆者に非常勤講師のmanabaページへのアクセス権を付与してもらい、上記の作業を一貫して筆者が行うことにした。課題については各教員が自身のmanaba上で連絡し、対応した。オンデマンド型授業の実施が前期全体へ及んでからは、非常勤の先生方にも担当クラスの授業を自身で行っていただくことにした。

この間の問題として挙げられるのは（これ以降も該当するのであるが）、非常勤講師には大学のアカウントが一部しか付与されていなかったために、アクセス制限の点から筆者が配信している講義動画を確認できず、学生がどのような説明を聞き、課題を解いているのかわからないまま課題のチェックを行わなければならないという事態が生じた。5月11日以降非常勤の先生方が担当クラスの講義配信を行った後も、同じ理由から自分の授業がどのように収録されているか、映像の様子を確認することができなかった。さらに自宅でパワーポイントによ

る収録を行ったとしてもその後の編集処理は教務課の事務職員が行うことから、大容量データの送受信がうまくいかないといった事態も生じた。その他、自宅のデスクトップ型PCにマイク、カメラが付いていないため自宅での収録ができないのだが、購入するにしても社会全体の在宅勤務の急増から売り切れ状態が続いており物理的に対応できない、という訴えも出てきた。その後、自宅での収録が不可能な教員は大学へ出校し、講義室内での収録を行うことによって対応することになったが、収録可能講義室の予約状況の都合で、これらの教員の授業は当初の授業スケジュールからは大幅に遅れることになった。

二つ目は講義収録に際しての教科書の取り扱いの問題である。具体的には著作権上スライドへ教科書本文の画像を貼り付けることが可能か、PDFファイル化して配布資料の一つとしてよいのか、といった問題である。筆者が授業収録開始時には改正著作権法35条の運用についても不確かな状況であったので、スライド作成時に使用している教科書の出版元に問い合わせた。1社の回答は、オンライン教材の場合には著者の了解が必要であるため、いましばらく時間を要する、また改正著作権法が通ったのちはこれらの許可なく掲載、配布可能というものであった。もう1社の返事は、学生の当該教科書購入を前提に、今学期に関しては学内関係者のみ閲覧可能なサイト内で練習問題頁を掲載したり、動画内で教科書の内容を映すことは可能という内容であった。4月の段階では出版社に対して各大学からの問い合わせが急増したことから、担当者からの返事を得るのに時間がかかり、その時までスライドの作成や、講義の配信にストップがかかった状況であった。その後許諾を得て、準備を進めることとなったがここでも小さな問題が生じた。入構制限によって学生は教科書を学内で購入できなくなったため、本学で

教科書販売を担当している京都廣川書店がすべての学生に対して教科書一式を配送するという作業が行われた。そのため学生の手元に教科書が届くには時間差が生じ、受講するすべての学生が教科書を見ながら授業を受ける、という前提を取り払い、教科書をまだ持っていないでも理解できる授業を行う必要が生じたのである。そこで教科書の該当ページをスキャナーで取り込み、JPG ファイルにした後、トリミングし、スライド内に貼り付け、教科書本文を提示する形式となった。しかし同スライドを授業用資料として公開する際にはスライドのサイズが大きくなり、manaba のコンテンツ内に掲示できる上限を上回ってしまったため、スライドを分割するか、画像のみを削除するかの必要が生じた。数回の試行錯誤の後、最終的には教科書本文や練習問題の内容をすべてスライド内に書き込むことでサイズダウンを行うことに成功したが、当然作業時間が増え、準備の段階で大幅に時間がかかることになった。その後著作権に関しては、日本全体でのコロナ禍の影響を鑑み、改正著作権法 35 条が前倒しで発効されることとなり、2020 年度に関しては特例として無償利用が可能となった。

学生の方で教科書に関する問い合わせが生じたのは 2 年次生対象の「ドイツ語 2」の授業である。本来「ドイツ語 2」の授業内容は、1 年時の授業内容を復習しながら、音読、リスニングを中心に行うことによって学修項目の定着をさらに強化させるというものであるが、当初はオンデマンド型授業が一時的な措置とみなされていた為、指定していた教科書の使用開始を遅らせ、一方的な授業でも理解しやすい文法の授業を「ドイツ語と文化」の延長として行うことにしたのだ。その際前年度の「ドイツ語と文化」で受動態、関係代名詞、接続法といった難しめの文法項目が未習事項となっていたことが幸いした。しかしながら、授業が開始されてか

らの授業内容変更ということで昨年度使用していた教科書が用意できないと数名の学生からの問い合わせがあった。上述のように新年度に使用する教科書は自宅に届けられるものの、前年度の教科書が手元にあるとは限らず、中には緊急事態宣言を受けて実家へ帰省しているために、下宿にそのまま置いてきた教科書を取りに行けないと連絡してきた学生もいる。そのような連絡を受けて、学修項目をスライド内に提示し、教科書が手元になくとも理解が可能な授業づくりを実施した。

b) スライド作成時の問題点

通常の対面授業と異なり、パワーポイントを使用する際に気を付けなければならないのはスライド 1 枚当たりの文字数である。映画字幕が 1 秒間に解読できる文字数を考慮して付されていることはよく知られているが、ワーキングメモリ容量は個人により異なるため²⁾、学会発表や報告のように一方的に視聴するのではなく、新出の未習事項を理解しながらノートを取り、さらに練習問題を解く、といった授業の際に学会発表のようなスライドを作ってしまうと、圧倒的に文字数が多くなり、ノートテイクが追い付かない。そのため例えば教科書ではわずか 4 問の練習問題も 1 問につき 1 枚のスライドを用いて説明したり、「ドイツ語 2」の長文テキストの読解では 1 枚のスライドで 1 文を扱い、語彙、文法項目、意味、和訳の例、注意事項等を説明しなければならなかった。教員側は教科書の内容や受講生が習得すべき事柄を多く提示しがちであるが、仮にパワーポイント内に記した情報をすべて手書きで板書しながら授業を行うことを想像してみれば、パワーポイントを用いる授業はいかに多くの情報を短時間で受講生側に提示し、理解を求めているかがわかるであろう。この点については繰り返して視聴可能なオンデマンド型授業という性質が幸いしたが、同

様の授業を今後対面で実施する際には、その点を考慮したスライドを作成するよう努めるべきである。

学期終了後のアンケートでは、教員の発音が速すぎて聞き取れない、書きとれない、といった返答があったことから、スライドに記入していないことを板書せずに、音声のみで伝える際の工夫も考えておく必要があると知らされた。既述したように、発音練習を含む最初の数回以外はカメラをオフにし、ファイルのサイズダウンを行ったが、年度末に参加したセミナーでは、学習効果の点からすると小さくてもいいからスライドに教員の顔が見えていたほうが良い、と報告されていたので、この点も反省箇所の一つである。また一年間オンデマンドでドイツ語の授業を受講した1年次生は、そもそも大学での授業の受け方といったものを習得していない。学期終了後に実施されたアンケートでは、スライドに書かれていないが、話していた内容で重要なことがあった、という回答も見られたことから、学習方法そのものの教示やノートテイクの技術伝達も踏まえてスライドを作成する必要性を思い知らされた。スライドの提示とノートテイクを一体化させるための試みとして、今後は動画収録に使用するスライドのうち、重要項目などの一部を穴埋め式に加工したものを授業前に配布し、板書の代わりにスライドを完成させながら動画を視聴させたり、あるいは重要な箇所に「ポイント」などの吹き出しを挿入しておき、教員が話すポイントを記入するよう指示しながら解説する、などの方法が効果的なのではないかと考えられる。

c) 教授方法

オンライン授業に関する基本的な事柄として、一般には「対面授業をそのままオンライン授業に持ち込んではいならない」、「目的から形式を選択する」べきだと言われている³⁾。しかし

今回は全国の教員の多くが半ば強制的にオンライン授業を実施することになった。オンライン授業のうち、オンデマンド型授業は本来自学学習に適しており、授業内でディスカッションする項目に関する知識をあらかじめ準備しておく活動に用いられることが多い⁴⁾。しかしながら外国語の授業、しかも多くの大学生にとって初習言語であるドイツ語の授業とは知識伝授型の一方的な授業ではなく、むしろ実習に分類されるべき科目の一つである。かつて大教室で数百人を相手に教員が一方的に説明して終わるといった、いわゆる文法訳読型の授業の悪評については改めて説明する必要はないであろう。これらの反動として英語をはじめ多くの外国語の授業運営に際して、様々な教授法が開発され、ダイレクト・メソッド、オーディオ・リンガル法、オーディオ・ヴィジュアル法、折衷方式、コミュニケーション・アプローチや比較文化的アプローチなどが採用されてきた。その後もトータル・フィジカル・レスポンス、サジェクトペディー⁵⁾や近年ではタスク中心型授業、プロジェクト型授業、CLIL⁶⁾など英語教育において様々な教授法が実践されている。いずれも現在の外国語教育においては学習者を中心に据え、ペア・ワークやグループ・ワーク、ピア活動などを通じて自律型学習者を育成し、教員はそれらをサポートするコーチの役割を担うという立場が優勢である。もちろん文法訳読型授業にも利点はある、文献を研究、調査対象とする分野においては決して時代遅れではない本質的な教授法である。しかしながら、必ずしも文献講読を前提としていない本学の学生に対して、文法を中心とする授業を非同期型の授業形態で実施するのは授業スタイルと学習内容とが適合していないという点で大いに問題である。また発音練習における発声器官の使用法など、直接的、個人的な指導が必要な事柄も教員が確認しづらいという欠点が生じてしまう。それならば

Teams のようにリアルタイム・オンライン（同期型，双方向型）が可能なツールを利用すればよいのではないかという意見もあるかもしれない，もちろんそうなのであるが，それは後になってようやく気が付いた点であり，当時はとにかく講義を収録，配信しなければならない，と半ば追われているような状況にあり，効果的な教授方法について思いを巡らせたり，いくつかのツールを選択し試すといった余裕はなかった．そもそも収録開始時には受信側の ICT 活用環境が整備されているかの確認もとれておらず，スマートフォンしか所有していない学生に対し大学が iPad を貸し出すようになるのは後のことである．そのためこの時点では教員，受講生が全員リアルタイムで参加できる授業形態の選択肢は少なくとも筆者が担当する授業に関しては存在せず，オンデマンドの配信を続けるのみであった．

ドイツ語の 2 つの授業の内訳について述べておくと，授業の展開の見通しを持たせるために冒頭で本日の予定と学習項目を提示し，最後にまとめを行った後，CAN-DO リストに相当するチェックリスト（図 2）を掲げて，何ができるようになったのかを振り返ってもらうよう努めた．その次の回の冒頭では課題の解説のほか，前回の授業の復習を行い，そのうえで新出項目を扱うようにした．

英語と異なり初習言語の授業では，極論すれば学習者にとって学習内容は「ほぼすべてわからない」くらいの前提で授業を展開しなければ，わかりやすい授業とはならない．そもそも 1 回説明した程度でマスターできるのであれば誰も語学学習で苦労はしないだろう．「既に説明した」，「教科書に書いてある」といった説明やフィードバックは学習者にとっては何ら助けにはならず，同じことを何度でも繰り返して説明する必要がある．そのため本来は年度初頭より質問しやすい環境づくりに努め，学習者同士で確認しあう時間を取ったり，グループで解答を導き出したりするなどの様々な活動を行う必要があるのだが，オンデマンド型の授業において学習者は，残念ながらそれらの様々な活動形態をとることができず，教員からの一方的な説明を視聴した上で課題に取り組まなければならない．特に 1 年次生は学生同士のコミュニティーも形成されておらず，教室という共有できる空間もないため，孤立した状況で視聴しなければならず，たとえ課題へのフィードバックがあったとしても，基本的には通信教育や独学に近い授業形態であったと言わざるを得ない．

さらに本項の初めに述べたように筆者は「対面授業をそのままオンデマンドに持ち込む」という授業展開をしてしまった．視聴者の集中力や分かりやすさの点から，オンデマンド型の授

今日のチェック項目

- ☐ 分詞の種類を言えるようになった？
- ☐ 現在分詞の意味、用法を理解した？
- ☐ 過去分詞の意味、用法を理解した？
- ☐ 形容詞の付加語的用法の語尾を復習した？

図 2 ドイツ語 CAN-DO リストの一例（授業終了時に提示）

業動画の長さは10分程度が良いとされており、1回の授業ではポイントを絞ったうえで3つくらいの動画を配信し、それに対応する課題やフィードバックを行うべきだとされているが⁷⁾、そのような基本的な注意事項に関する知識を持ち合わせるようになったのも最近のことである。

d) 課題とフィードバック

課題の回収とフィードバックについても教員の思い通りには進めることができなかった。当初は課題の提出期間を1週間程度に設定し、次回の授業冒頭で解答や解説を行うことを考えたが、既述したように授業開始が遅れたために実際の学事暦に追いつくまでに時間差が生じたことと、学生側の閲覧環境が把握できていないために、学習権を奪わないように短期の日時を設定した課題提出は見送らざるを得なかった⁸⁾。7月21日には本来の学事暦より2週間遅れて9月28日より後期の授業が開始されること、後期も継続して講義はオンデマンドで実施することが発表された。後期は1月に各種の試験が控えているという理由からか、授業配信を12月25日までに終える方針が後に出されたが、このために後期の講義配信に関しては13週で14回分の動画配信を行う必要が生じた。課題提出の期限を1週間に設定すると学期中に14回の授業を提供できない計算になるため、ここでも課題の解説を講義内とは別に行う必要があった。

前期中はmanabaの「レポート」欄から課題を提出するか、登校時に研究室へ直接提出するかいずれかであったが、課題の提出時期を大まかにしか設定することができなかったために、個別のフィードバックが困難となり、最終的には模範解答の掲示（前期）、課題のための解説スライドと動画を別個に作成し、公開して対応（後期）することになった。具体的に述べると、教科書の練習問題をWordに書き出したものをコンテンツとレポート欄に掲示し、同機

能によって回収する。回収されたものがWordファイルであれば「コメント機能」を用いて解答の訂正、スペルの修正、注意事項を記入したうえで返却する。手書きのものをPDFファイルで提出された場合は、プリントし、赤ペンを入れたうえで再度スキャンし、manaba上で返却するようにした。しかし提出期限が緩やかにしか設定されていないため、提出時期がばらばらであり、いつどのタイミングで学生からの提出があるかを常にチェックしていなければ迅速な対応ができず、授業回数が進むにつれて個別対応が困難になってしまい、次第に機能しなくなってしまった。これはひとえにシステムというよりは教員の処理能力が追い付かなくなったことが原因である。大学設置基準によればオンデマンド型の授業では設問解答、添削指導、質疑応答による十分な指導が求められ、それによって双方向性を保証することを条件としているが、この観点からすると筆者のフィードバックはあまりにも不十分であり、個々の受講生には対応できていなかったと言わざるを得ない。後期は一部で対面授業が再開され、学生が登校する機会が設けられたことから、前期の反省を踏まえて、課題は研究室へ直接提出することを原則として、チェックをして返却する従来通りの方法にした。とはいえ必ずしもすべての学生が研究室へ来られないことも考慮して、前述のとおり、課題提出から1週間後を目安に練習問題の解説用スライド、解説動画を作成し、収録、公開した。しかしこの方法にしても学生が課題を解いたタイミングと解説が与えられるタイミングとに時間差が生じることから、効果的な指導方法というには程遠いと思われる。

e) 試験

オンデマンド授業を実施してきて問題になったのは試験の実施形態とその内容である。「対面で実施する」、「リアルタイム・オンラインで

時間制限を設けて実施する」、「オンデマンドで問題を提示し、期間内に提出する」等オンラインでの試験方法はいくつか考えられる。また試験そのものの意味合いとしても、「学修項目の理解度を確保するための試験」、「授業で学んだ知識を用いて応用する力があるかを把握するための実力試験」、「一定の学力に到達しているものを振り分ける選抜試験」などが想定される。今回筆者のドイツ語授業では、学習者の意向に反して一方的にオンデマンド授業を受講しなければならなかったという学習者の立場を考慮して、期末試験は学修項目を理解しているか、授業内で扱った文法問題が自力でも解けるかを確保するための試験と位置づけ、1週間程度の期間を設けてオンデマンド型で行った。この場合の問題点は、教科書、辞書、知人の意見等なんでも参照可能となる点である。当然不正が生じる可能性は非常に高く、ある観点からすれば試験とは言えないかもしれない。しかし筆者が独学でフランス語、イタリア語、ラテン語、古典ギリシア語等を勉強する際は、忘れてしまった項目については辞書や文法書で常に確認して練習問題を解いているし、かつて筆者がドイツ語の授業を実施した特許翻訳者のようなプロの翻訳家でも各種の辞書やインターネットの自動翻訳機はツールの一部として常に用いていた。筆者の専門であるドイツ語や文学の授業を準備する際にも辞書や文法書を用いずに行うことはないし、専門文献や1800年前後の原典を講読する際には辞書や参考書は必須である。そのため辞書や参考書の参照は語学学習にとって当然の行為であって、不正行為でも何でもない。そもそも授業時には「教科書や辞書で確認するように」と伝えているにもかかわらず、なぜ試験時には辞書等の持ち込みが不可なのか。「試験だから」という固定観念を見直し、語学の授業を担当する教員はその点を改めて考えなければならないであろう。こういった状況を考慮し、今

回は「わからないときに自分でも解答にたどり着けるか」、「何を参照したら答えが導き出せるのか自分で判断できる」という学習ストラテジーの獲得も試験の目的の一つとしてとらえ、何を参照してもかまわない、という条件のもとで試験を行った。

ただし、不正行為として Google 翻訳のような自動翻訳機が導き出す訳文と一致している部分が認められる場合や、他の学生の解答との高い類似性が見られる場合は、ともに減点対象とした。具体的には普通に独和辞典を参照したら出てこないような訳語が答案に認められ、しかも試験問題を Google 翻訳にかけた場合その訳語が見つかるといった場合や、間違いが見られるドイツ語作文（しかも通常は行わないような間違い）において、全く同じ解答が他の答案にもみられた場合は減点対象とした。これらについてはいずれも問題提示の際に注意事項として予め伝えておく必要がある。そうしなければ意味的には間違いがない訳文でもなぜ減点されているかの説明がなされないからである。

同期型、非同期型とを問わずオンラインで試験を行うとなるとこのような不正行為はつきものであるが、発想を転換して、期間内は何回でも答案を出すことを認め、最終的な答案をもって評価対象にしたり、あるいは提出されるたびに採点して返却し、満点を取るまで試験を受け続けなければならないといった方法であれば、オンラインで実施しても「合格する」という目的以上の教育効果が得られると思われる。たとえ教室における従来のような対面型の試験であっても、意味も分からずとにかく暗記して解答し、試験後に直ちに忘れてしまうようでは、そもそも試験を実施する意義が疑われる。したがって、試験とはこのようなものだ、こうあるべきという試験観についても改めて見直し、何のために試験を行う必要があるのか、試験と講義との関連性はどの程度保持されているのか、

何を測定するための試験なのか、などを各教員が明確にしておく必要があるだろう。

f) 評価

前項と関連しているが、オンデマンド型の授業では評価についてもいくつか悩ましい事態となった。シラバスで提示している評価項目のうち、いわゆる平常点に組み込まれる「授業への取り組み、授業参加」が確認できなくなってしまったからである。そもそも教育評価においては、教員が行う評価項目として「興味・関心」、「知識と理解」、「思考力や論理力」、「科学的態度や創造的態度」、「種々の技能」などの項目が挙げられる⁹⁾。その他にも学習者自身が行う「自己評価」、学習者同士が行う「相互評価」も評価には含まれる。学期末に行われる筆記試験は関心や態度といった情動的側面を切り捨て、知識及び理解度を測定するものであるため、定期試験の点数を評価の中心に据えることは、評価項目の中でもごく一部を扱っているに過ぎないことになる。そのため筆者は長年にわたり、関心や学習態度を測るものとして学習記録やポートフォリオを導入して評価の際の補助資料としたり¹⁰⁾、到達度を自ら判断する自己評価、グループ・ワークの際の協調性や取り組みを他の学生が評価する、学生による相互評価なども最終的な成績に含めてきた。しかし今年度に関しては、学生同士の共同作業を伴わず一方的な視聴で受講しなければならなかった点や、学生の様子を把握できないまま実施するのは難しい点を顧慮して、これらの評価方法の導入を見送った。

そのため中間試験、定期試験（いずれも提出期間を設けてのオンデマンド試験）、課題の提出、動画の視聴と manaba の補助機能である respon への出席登録を成績評価対象として、これらを総合的に把握して成績を算出した。その際出席登録はいわゆる出席点としてではなく、

授業への取り組みの意欲の表れとして扱った。動画視聴については、各回の授業コンテンツの閲覧履歴、動画の閲覧履歴等を確認して記録したが、残念ながら閲覧の事実は残されていても、どの程度閲覧したのか、動画を全部視聴したのかまでは把握できず、この点についてはこれ以上の確認は不可能であった。これらに対しても、授業内で取り上げた項目に関する注意点や、スライドには提示していない重要項目を書き取らせて提出したり、講義動画全体をきちんと視聴していないと回答できないような課題を設定するなど、授業デザインを工夫する必要があるだろう。

g) 参考文献へのアクセス

緊急事態宣言発令中、大学図書館や公共図書館は閉館され、書店も休業したり、開業時間を制限したりしたため、手元にない資料については閲覧したり、複写できない事態が生じた。特に「外国文学」の授業では毎回何らかの文学作品を取り上げ、それらの講読を前提としているが、図書館へ立ち入りができないことから、授業準備では自身の蔵書に頼らざるを得ず、引用や参照が制限された。授業で扱う文学作品については公共図書館で借りたり、書店で購入して目を通しておくよう指示する予定であったが、学生の方でも各自で資料を借り出すことができないため、講義用資料として配布しなければならないことになった。

4. 今後の課題

a) 教員の課題

通常、新しい教授方法を授業で用いる際は、理論的根拠を把握したうえで方法論や実践例を学び、自らの授業内で試行錯誤を繰り返し、授

業のどの部分にどのように取り入れれば効果的な学習をもたらすかを検証する作業が必要である。筆者の今までの経験からすると、新しい教授方法や活動を学期途中で導入してもうまく定着せずに受講者側に混乱をもたらすことが多いため、新しい活動を導入したり、試みたりするのは学期初頭からが望ましい。そうすれば受講者も「この授業はこういうスタイルで進めるんだな」と受け入れやすくなる。しかしながらここまで述べてきたように、今年度のオンデマンド型授業は半ば必然的にやらざるを得なかったという状況で開始された。オンライン授業の長所はあるにもかかわらず、少なくとも今年度に関しては教員の意志でオンライン授業を導入したのではなく、各教員が本来行いたいと思っていた授業方法を断念して、その代替として導入せざるを得なかった教員が多いだろう。そのような中でより良い授業を行うのは実際問題として教員側の意欲が伴わなければ難しい。しかも実施に当たっては、教員自身もいつ感染するかわからないといった不安を抱き続けねばならなかったし、オンライン授業に関する準備不足もなかなか解消されなかった。そのため授業内容や提示方法、配信スケジュール等について必ずしも教員の思い通りに進められないことが少なくなく、結果的に教員のみならず、学生、事務職員、保護者など学校教育に携わる多くの人々が疲弊してしまった。それでも授業の目的はそもそも何か、誰のために行うのか、何を目的しているのか、などの原点に立ち返り、授業を改善する努力は継続しなければならないのは当然であるし、仮にコロナ禍に見舞われていなかったにしても常にそのような意識をもって授業に臨まなければならないのは教育者としての義務であろう。

今回のコロナ禍におけるオンライン授業の展開に関して、「オンライン授業か対面授業かは本質的な問題」ではなく、「それまで学生にき

ちんと向き合ってきた教員は、オンライン授業もうまい」、「オンライン授業の評価が低い教員は、よほどのIT音痴か、もともと授業がうまくなかったかに違いない」といった辛辣な意見もある¹¹⁾。大学の教員に限らず、一般的に教員養成を受けていない教員は「自身が習ってきたようにしか教えられない」と言われている。特に大学教員は教員免許を必要としないため、教授法や授業運営についてトレーニングを受けたものの方が少ないと思われる。その結果授業見学によって他の教員に批判されることや、自身の授業を収録し改善を図るという機会はほぼ皆無であり、自分自身の授業スタイルや教え方に口を出されることを嫌うものが少なくない。教職課程の教育実習や教員同士の授業見学では、講義室内で立つ位置や視線の送り方、板書の方法、声の大きさ、発問の内容とタイミング、授業開始時の導入方法や新しい学修項目の提示方法等、様々な点についての検証がなされ、授業見学の後には振り返りのための意見交換会、改善方法の提示などが求められるのが普通であろう。今までに他の教員による授業見学を受けたことがない教員も、今回のオンデマンド型授業によって映像を通して自身の授業を客観的に見ることが可能となった。そのためこれを機に「良い授業とは何か」ということを今一度考え、自身の授業の短所を謙虚に受け入れ、改善を試みていく姿勢が求められるだろう。

b) 技術的な課題

今回のコロナ禍での授業によって、思いがけずリモート授業やオンライン授業の導入が一気に進んだ。それによって今後はいわゆる対面授業だけでなく、必要に応じてオンデマンド型の動画配信やリアルタイム・双方向型オンライン授業等を組み合わせた、様々な授業スタイルが展開されるであろう。その際には今年度の授業内で生じたような技術上のトラブルに対するス

トレスをなくし、授業に専念するためにも技術上のサポートが今まで以上に必要になる。授業内のトラブルが単に技術上のスキルの問題であるのか、教員の個人的資質によるのか、大学の制度や ICT 環境によるのか等を判断し、それに合った解決方法を模索していかなければならない。

その際に挙げられる課題として、まずはオンライン授業実践のためのマニュアルの改訂作業が挙げられる。今回は 2020 年度開始直前に提供されたマニュアルに基づいてオンデマンド型授業を試みたが、大学全体に関連する事柄であれば、「質問がある場合は個別に質問し、その対応策を教えてもらう」だけでなく、授業実践時に生じる様々な問題を教職員間で共有すべきではないだろうか。学期開始前のマニュアルはいわば最低限のものであり、授業を開始してから分かった問題や教員からの要望に応えたマニュアルの改訂と操作方法や実践報告などの研修会は今後も継続して行われたほうが良いだろう。また、講義収録に関する質問窓口は大学内で確かに設けられているものの、今後も引き続きオンライン授業を併用したり、オンデマンドで講義内容を提供する際には、やはり ICT 専門のスタッフが常駐していることが必要であろう。当初のうちは知識を備えた教職員が指導役を担ってもよいが、やはり指導役教員自身の授業や研究活動に充当する時間や体力を犠牲にしないためにも、専門スタッフの方が望ましいだろう。さらに欲を言えば、このような授業を行いたいという教員の要望に応え、教員と一緒に方法を考えるチューター的な、いわば教育への活かし方を伝授できるようなスタッフがいる部署があれば、教員からの相談はしやすくなるし、安心していろいろな方法を試すことが可能になる。そのためには PC スキル一般の知識だけでなく、教授法一般についての知識を備えた専門的な教育スタッフ、また分野ごとの特性に合わ

せてそれらを指導するチームリーダー等の存在が必要であろう。

5. 結語

英語教育をはじめ、語学教育においては、様々なメディアをどのように授業に取り入れるのかは長らく教授法に付随してきた問題であり、語学教育の分野と ICT の活用は古くて新しい問題である。例えば大修館書店より出版されている月刊誌『英語教育』においても「英語教師のための ICT 活用ガイド」が連載されており、2021 年 3 月号ですでに 228 回目を迎えている。かつて勉強前にバロック音楽を聴くことが効果的とされて、授業開始時に数分レコード等でクラシック音楽を聴いてから授業を始める時代もあったし、カセットテープが登場した頃はいわゆる LL 教室がどの学校にも設けられ、これによってネイティブスピーカーがいなくても語学教育は問題が無くなると推奨された時もある。紙媒体の教科書だけでなく、様々なメディアをより効果的に用い、学習効果を高めるにはどのような方法が適しているかは、言語教育のみならずほぼすべての授業に関する問題であろう。そのため、今回多くの教育機関において半ば強制的に導入されたオンライン授業についても筆者は個人的にその流れの一つに過ぎないと考えている。というのも 10 年ほど前にパワーポイントが用い始められたころには、「板書でなく、パワポで提示すると学生は前を向いてスクリーンを見なくてはいけないから、下を向いて教科書をのぞき込んでいるのに比べて学生が積極的に参加したり、内職が減る」と言われ、意欲ある教員は積極的に授業時に導入を行った。しかし現在のようにスライドによるプレゼンが標準化すると目新しさも減り、学生が必ずしも常にスライドを集中して見ているわけではないこと

は、学会等における自分自身の態度を振り返ってみればよく分かる。そのため同期型、非同期型とを問わずオンライン授業もそれによって授業が劇的に変わると過剰な期待をするのではなく、どのような教授方法に適合しているのか、自身の授業スタイルや特性とそれらの教授方法がどの点で適合しており、またどの点で不向きであるのかを見極めて導入しなければ、教室の前でカセットテープを流し続けて、それでリスニングの練習は問題なし、としていた語学教師と同じになってしまう。既に多くの授業報告で指摘されているように、コロナ禍における授業の実践方法や自らの授業の振り返りによって、従来当然と思われていた様々な要素を再確認する機会がもたらされた。この機会を教員は自身の授業を検討する好機ととらえ、必要に応じて教育観や授業観を新たに構築し直す必要があるだろう。他方で「もうコロナ以前の授業には戻れない」といった発言が盛んになされているが、この点については必ずしもそうとばかり言えないのではないかと考えている。コロナ禍に見舞われる前にも様々な授業スタイルや教授法を試し、よりよい授業を提供する努力を行ってきた教員は数多くいるであろうし、長年の経験と失敗とを踏まえて現在のスタイルに至った授業であれば、またそれがすでに高い教育効果をもたらしていると教員も受講生も実感している授業であれば、今回の騒動が終息した後もそれらの授業は継続すべきであろう。筆者自身についていえば、今年度の授業がどの程度機能していたか、改善点がどこにあるのかは、痛いほど実感しているため、今後の授業運営に際しては、改めて何のためにどのような活動が必要であるのかを検証しつつ、今後の授業デザインを構築していかなければならないだろう。

- 1) 大学の動きについては着任前から基礎科学系一般教育分野主任より逐次伝えられていたものの、

着任前の出来事であるため具体的な内容について把握できたのはかなり後になってからのことであった。また着任前には研究室へ立ち入ることができず、教材等を準備することができなかったことや、大学のアカウントが支給されていないため大学のネットワークへの接続が不可能であり、4月1日以降になってようやくそれらに着手できるようになったこともまた筆者が授業の準備を遅れさせる要因の一つとなった。3月中にはせいぜい教科書の下読み、各課の学習チェックシート（図1）の作成やオンライン授業を見込んで練習問題をWordに入力することくらいしかできていなかった。

- 2) ワーキングメモリについては一例として門田修平、シャドーイングと音読の科学、2007、コスモピア、東京、129-194を参照。
- 3) 竹内理。オンライン英語授業の留意点—効果を生み出すために。英語教育2020年10月別冊 英語教師のためのオンライン授業・動画配信ガイド、2020、大修館書店、東京、66-67を参照。
- 4) 一例として石井英真監修、秋山貴俊、長瀬拓也。ゼロから学べるオンライン学習、2020、明治図書、東京；赤堀侃司。オンライン学習・授業のデザインと実践、2020、ジャムハウス、東京；英語教育2020年10月別冊 英語教師のためのオンライン授業・動画配信ガイド（前掲）などを参照。長瀬は『ゼロから学べるオンライン学習』において、オンラインの授業を「同期・一方向（ライブ講義型）」、「同期・双方向（ミーティング型）」、「非同期・一方向（オンデマンド型）」、「非同期・双方向（課題提出型）」の4つに分類している（前掲書、52）。
- 5) 吉島茂、境一三。ドイツ語教授法 科学的基盤づくりと実践に向けての課題、2003、三修社、東京、113-140を参照。
- 6) 例として松村昌紀。タスクを活用した英語授業のデザイン、2012、大修館書店、東京；渡部良典、池田真、和泉伸一。CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻原理と方法、2015、ぎょうせい、東京を参照。
- 7) 木村修平。オンライン授業で加速する動画教材の活用。英語教育2020年10月別冊 英語教師のためのオンライン授業・動画配信ガイド（前掲）、72-73を参照。
- 8) 実際に8、9回目頃になってようやく授業を閲覧する環境ができた受講生もいた。
- 9) 梶田叡一。教育評価 第2版補訂2版、2002、有

- 斐閣双書，東京，164 参照。
- 10) ドイツ語授業におけるポートフォリオの活用に関して，拙論ドイツ語授業におけるポートフォリオの使用．2011，松岡幸司編，教室という現場から考える日本のドイツ語授業，日本独文学会研究叢書 79 号，日本独文学会，東京，39-53 を参照。
- 11) 中村正史．危機の中の大学—浮き彫りになる課題と未来への展望．2020，大学出版 大学と社会を結ぶ知のネットワーク，124，2．